

『本が死ぬところ暴力が生まれる』

電子メディア時代における人間性の崩壊

パリー・サンダース著/杉本 卓訳 新曜社 本体 2,850円+税

評者・養老孟司（北里大学教授・解剖学者）

この題を読んだだけでは、いったいなんのことかと思うかもしれない。副題の「電子メディア時代における人間性の崩壊」を読むと内容がなんとなく想像できるであろう。電子メディアの時代になって、活字が読まれなくなり、その影響が出るのだな、と。

著者の言いたいことは、そう単純ではない。しかしながら興味深い。著者はまず、識字社会と口承社会の違いから説き起こす。こう書くと難しく見えるが、要するに文字ができた社会と、文字がない社会では、人々の考え方たがどう違ってくるか、ということである。われわれは文字のある社会、つまり識字社会に住んでいるから、文字がないときの人々の考え方を忘れてしまっている。こうした無文字社会、すなわちものごともっぱら「口で伝えられる」社会を、われわれはただ「原始的」と見がちである。こうした見方が浅薄なものであることは、わが国の大学者、本居宣長を持ち出すまでもあるまい。

口承社会から識字社会への転換によって、人々の考え方はきわめて具体的なものから、やや抽象的なものに変っ

てくる。著者はそれを英語の実例を引きながら説明する。ここは日本人にはピンとこないかもしれない。だから先に本居宣長の例を挙げたのである。宣長はすでにこの問題に十分に気づいていたと言つていい。

この本の主題はその後にある。社会が口承から識字に変わるように、子どもの発達もまたそうなのである。そこに著者の主張の力点がある。社会の場合には、いきなり文字ができるわけではない。それ以前に、十分な口承社会の発達がある。いまの子どもはどうだろうか。

子どもはいわば、お母さんとの親しいやりとりのうちに、社会でいうなら口承の段階を経過する。それが十分に果たされ、豊かな口承段階を経て、はじめて識字が意味を持ってくる。ところがいまや子どもは、もっぱらテレビづけではないか。

テレビの大きな問題はどこにあるか。子どもがいかにそれに語りかけても、応答がない。テレビは自分の都合で勝手に話しまくるだけである。これでは子どもは必要な口承の段階を経ることがない。基礎なしに、識字に進んでしまうこ



となるではないか。

著者はたとえばアメリカのいわゆるストリート・ギャングたちを頭に置いている。こういう若者たちの多くは文字が読めないという。それを矯正するために文字を教えようとするが、それはうまく行かない。その理由は識字に至る以前の段階、つまり口承段階が不十分だからなのである。

日本は幸い、世界に冠たる識字国である。しかし、著者のいうような豊かな口承段階の必要性は、いま子育てをしている人たちにとって、大切な指摘であろう。この書物は未来社会への重要な警告と見なすことができる。